

## 韓日発掘交流を終えて

私は国立慶州文化財研究所と奈良文化財研究所の発掘調査交流の一環として、2018年8月6日から9月28日まで、奈文研において複数の調査研究業務を体験する貴重な機会を得ました。

慶州で調査を担当してきた遺跡は新羅古墳でしたが、今年は東宮と月池内でも正殿と推定される大型建物跡を発掘してきたことから、奈良文化財研究所の調査内容と共通する部分があり、様々な点で良い経験となりました。

8月は、平城京内の法華寺南側区域の調査に参加しました。水が湧き出る低湿地という環境に全員が苦労しましたが、奈良時代の柱根や、木簡、曲物等の有機質遺物は、韓国ではなかなか扱う機会がないため、興味深いものでした。

9月に経験した藤原宮の調査現場も、大極殿院の北門・北面回廊と排水溝、およびそれ以前の遺構との複雑な重複関係をあきらかにする重要な成果に接する良い機会でした。特に、悪天候の中、現地説明会に600人以上が参加する様子に、一般の方々の考古学と歴史に関する熱意を感じ、印象的でした。

発掘調査以外にも、奈文研所蔵の膨大な数量の木簡、多様な研究テーマ、実地調査で訪れた大阪、東京、島根等の博物館や遺跡は、私自身の研究に大きな刺激となりました。

つたない日本語にもかかわらず、2ヵ月間の日程を無事に終えることができたのは、奈文研の皆様のおかげです。この場を借りてお礼を申し上げるとともに、今後の両機関の持続的な交流・協力を願っております。

(国立慶州文化財研究所 尹亨準、翻訳 松永悦枝)



藤原宮大極殿院北門跡での調査風景

## 「奈良の都の木簡に会いに行こう!2018」 (日本学術振興会ひらめき☆ときめきサイ エンスプログラム)の実施

2018年8月21日・22日、小・中学生向けのプログラムとして、「奈良の都の木簡に会いに行こう！2018」(共催日本学術振興会、後援奈良県教育委員会・奈良市教育委員会)を実施しました。昨年に続き2回目の開催となる今回も、リピーターを含め予想をはるかに上回る多数のみなさまにご応募いただきました。今年もプログラムの運営を工夫し、小5から中3までの応募者全員(計49名)と保護者の方々にご参加いただくことができました。

開講式後、まず「木簡に会ってみよう」では、本物の木簡(水漬け・保存処理済み)をじかにじっくりと観察しました。そして用意した木簡で、参加者自身の名前に使われている漢字探しをしました。木簡と古代の漢字に親しみをもってもらおうという趣向です。また、木簡に関する基礎的な情報についても話を聞きました。

「木簡を探してみよう」と「木簡に触れてみよう」は、発掘現場から持ち帰った土を洗浄・分別して遺物を探し出す作業と、収蔵庫に保管してある木簡の水替え作業を体験しました。

2つの作業の合間のお昼には、奈良パークホテルのご協力により、木簡に登場する食材で復元された古代食を味わいました。食後には根拠になった木簡の説明も聞きました。食事はまさに生きた教材です。

最後の「木簡を読んでみよう」では、奈良文化財研究所の庁舎下で、平城京造営時に秋篠川旧流路を埋め立てた土からみつかった「奈良京」と書かれた木簡の解読に挑戦しました。その準備として左半を隠した文字を読んだり、同じ偏や旁をもつ漢字を考えたりするクイズにも取り組みました。

このように、プログラムは、座って話を聞くのではなく、作業を中心とした実習・体験型で構成しました。



水替え作業の様子

1200年以上も前のモノのもつ力を実感していただけたのではないでしょうか。

(副所長 渡辺 晃宏)